

CONTENTS

- ◆作業療法と道具…①
- ◆東京都作業療法士会福祉用具部の紹介…①
- ◆HOSPEX Japan 2014報告…②
- ◆作業療法領域で活用できるロボットの紹介…③
- ◆●●●●●●●●●●…⑤
- ◆アメリカ留学体験記…⑨
- ◆編集後記…⑫

作業療法と道具

作業療法は、障害のある方のために道具（福祉用具）を使って障害のある方や高齢者の生活が自立した、その人らしい生活が送れるように支援しています。

東京都作業療法士会では、福祉用具に関して活動をしている福祉用具部があります。会員だけではなく、都民に作業療法士が福祉用具を用いた支援をしていることを広める活動もしています。ここでは、東京都作業療法士会福祉用具部の紹介とHOSPEX Japanへの参加報告、作業療法領域で活用できるロボットの紹介をいたします。

東京都作業療法士会福祉用具部の紹介

東京都作業療法士会 福祉用具部担当理事 栗沢 広之

平成22年4月30日に公示された厚生労働省医政局長からの通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」において、各医療スタッフが実施することができる業務の具体例という項目の「作業療法士の範囲」として、福祉用具の使用に関する訓練と明記されました。日本作業療法士協会としても制度対策部福祉用具委員会の設置と活動や、生涯教育制度の福祉用具分野での専門作業療法士の認定も始まりました。当作業療法士会福祉用具部も「福祉用具・機器を利用する方々に適合させることは作業療法士の役割である」との理念のもと、研修会の開催やイベントへの参加・運営などを行っていますので、今までの活動の一部を紹介いたします。

（１）福祉用具研修会

参加者が実際に体験して感じてもらうことを大切に、明日の臨床から使える研修会企画を心がけています。昨年、今年以下は以下の研修会を行いました。

- ①車椅子ユーザーフィッティング：シーティングコンサルタント協会の理事で永生会病院所属の岩谷さんを講師に迎え、介護老人保健施設ひかわしたのご利用者やスタッフの協力いただきました。対象者のシーティングの評価や、シーティングによる姿勢や車椅子自走の変化を目の当たりにすることは、机上の勉強では体験できない貴重な研修会でした。
- ②ポジショニング研修会：内容的に1回では収まらず2回開催しました。株式会社タイカの協力をいただき、部員が講師となりベッド上のポジショニ

ングから、車椅子乗車時のポジショニングの研修でした。福祉用具部全員、事前にポジショニングについて講師より実技指導を受け、当日はアドバイザーとして各ベッドにつきました。

研修会の際にはアンケートを実施し、どのような研修の希望があるかを確認しながら企画をしていますが、断片的な研修会となっているので、今後は継続的に実施する研修会と、特別企画とに分けて開催するなどの案も話し合われているところです。

(2) イベントへの協力や企画

①国際福祉機器展（H.C.R.）：主催者側の特別企画として、ふくしの相談コーナー（福祉機器）を設けており、8年前から主催者より日本作業療法士協会を通して相談員派遣の依頼を受け神奈川県作業療法士会と合同で対応しています。また、会員への協力も呼びかけ、毎年数名助っ人として参加いただいています。ふくしの相談コーナーのほかにも、一時期OT協会でブース出展を見合わせていた時期に、神奈川県士会と合同で一から企画して出展及びセミナーの開催をしたこともありました。

②こどもの福祉用具展キッズフェスタ：都士会としてこのイベントに関わり始めた時には、福祉用具部で企画・運営をしていましたが、現在は事業部が主体となり、東京都理学療法協会と合同で展示ブースの出展をセミナーの開催を行っており、当部としては当日の手伝いとして参加をしています。

③HOSPEX Japan2014でのセミナー開催：主催の日本能率協会HOSPEXJapan事務局よりセミナー開催の依頼を受け、今回初めての取り組みとなりました。

（報告は、部員の永作が作成した報告書を参照）

自信をもって胸を張って「福祉用具は作業療法士が…」を言いたいですが、正直私自信も臨床で胸を張れるほどしっかりと役割を担い責任を果たしているかと言われたら、不十分な面も多くあります。そのように感じているOTも多いのではないのでしょうか。福祉用具部では、皆さんが現場で役に立つような活動、一般の方々への啓蒙活動や環境整備など、今後も継続及び進歩させていきたいと思っております。ご理解とご協力のほどよろしくお願いします。

HOSPEX Japan 2014報告

福祉用具部 永作 和洋

HOSPEX Japan 2014が、平成26年11月12日（水）～14日（金）東京ビッグサイトで開催されました。HOSPEX Japan 2014は、「病院・福祉設備機器展」「医療・福祉機器開発展」「病院・福祉給食展」の3つの展示会で構成されていました。また、それぞれの展示会ごとに関連セミナーや研修会を実施し、目的意識の高い来場者を誘致していました。来場者数は3日間合計で68,933名と、前年よりも1万人増加しており、会場内も様々な職種の方々が盛況していました。今年度は東京都作業療法士会セミナーを開催し、首都大学東京健康福祉学部作業療学科の井上薫氏が、「認知症を持つ高齢者ケアについて～作業療法の視点から～」を講演され、多くの聴講者が集まっていました。

認知症の基礎知識から作業療法の説明、井上氏が現在取り組んでいるロボット用玩具（PAROとPALRO）を使用した作業療法など、臨床現場で活かすことのできる講演内容でした。



作業療法領域で活用できるロボットの紹介

首都大学東京健康福祉学部作業療学科 井上 薫

最近、生活を支援するロボットへの関心が高まっています。新成長戦略「介護機器（福祉用具）開発・実用化の促進（平成22年6月）」に準じて、現在、「福祉用具・介護ロボット実用化支援事業（厚生労働省）」、「ロボット介護機器開発・導入促進事業（経済産業省）」が推進されています。さらに、神奈川県は国から地域活性化総合特区「さがみロボット産業特区－ロボットで支える県民のいのち－」の指定を受け、新産業創設へ向けて一大プロジェクトを展開しています。また、そのような流れに伴い、ロボットがマスメディアで取り上げられる機会も増えてきました。

作業療法における「作業」には様々なものがありますが、上記のようなロボット技術の実用化に伴い一部のロボットも作業活動へ利用することができるようになりました。筆者は、厚生労働省、文部科学省、神奈川県の研究助成を受け、ロボットに関する研究に取り組んでまいりましたが、今回、HOSPEX2014で研究成果の一部を披露する機会をいただきました。そこで、本稿において作業療法において活用できるロボットの一部を紹介させていただきます。

PARO（株式会社知能システム）は、（独）産業総合技術研究所において開発されたアザラシの赤ちゃん型ロボット（第9世代：約57cm、約2.5kg）で、本物のアザラシのように鳴き、動きます。言葉を話す機能、移動機能はありませんが、高性能な人工知

能を有し、学習機能をもっています。アザラシは宗教上の禁忌に抵触しないこともあり、PAROは欧米、オセアニアを中心に国際的に広く受け入れられています。ギネス世界記録では「もっともセラピー効果があるロボット」として認定され（2002年）、集中治療室でも活用可能な高い安全性をもち、米国食品医薬品局（Food and Drug Administration: FDA）に医療機器 Class IIのMedical Device（Neurological Therapeutic Device, Bio-feedback Device）として承認され（2009年）、治療に活用されています。研究では、Randomized controlled trial: RCTの研究デザインによる研究を始め多くの報告がありますが、具体的な効果は、認知症をもつ高齢者のうつ、ストレス、孤独感、徘徊や不穏の軽減、良いコミュニケーションや自主性の促進等が挙げられます。また、その他の疾患、障がいを持つ人にも良い効果が期待できます。PAROは現時点で、科学的な効果検証が進んでいる実用的な高性能ロボットとしては唯一のものです。PAROはPAROを好む人に対し上記の効果をもたらし、BPSDを減じる効果が期待できるでしょう。現在のPARO（第9世代）は、充電池の機能も向上し、毛皮も静菌加工となる等、実用性がより高まっています。価格は1年保証付が388,800円（税込）、3年間保証およびメンテナンス付で453,600円（税込）の他、レンタルもあります。

情報入手先例：株式会社知能システム：<http://intelligent-system.jp/paro-sale.html>、大和ハウス工

業株式会社：<http://www.daiwahouse.co.jp/robot/paro/>

PALRO（富士ソフト株式会社）は、ヒューマノイド型ロボット（高さ40cm、肩幅18cm、約1.6kg）で、高い音声認識機能を持ち、言語を介した楽しみを期待する人に適しています。レクリエーション機能を有し、現場スタッフへの業務支援の役割もあります。また、インターネットを介してメールや画像のやりとり、情報を音声で伝える機能もあることから、見守りやスケジュール管理等、秘書的役割を担うこともできます。使用に際しては音声認識のルールを理解する必要があり、介護者の支援を要することもあります。価格は、一括購入の場合、ビジネスシリーズが723,600円（税込）、レンタルもあります。

情報入手先：富士ソフト株式会社：<http://palro.jp/>

ここで重要なことは、ロボットは万能薬ではなく、ロボットにすべてを任せることができるわけではないということです。認知症をもつ人は「もの」と上手に関われないことも多いため、他の福祉用具と同

様に作業療法士等が効果的に関わる必要があります。また、「ロボット」と「ロボット様玩具」とは異なるという認識をもつことも重要です。もちろん、対象者によっては人形やぬいぐるみ、ロボット様玩具に癒しや愛着を感じることもあるでしょう。ただし、その人が「小児向けに見える」玩具を使用する際には、安心して触れ合える環境に配慮する必要があります。「子ども用玩具を持っているその人」が、周囲から偏見を持たれたり、不当に子ども扱いされてしまう危険性があることも覚えておきたいことです。誰もが安心して好きな活動を楽しめるように、作業療法士は慎重に対応するべきでしょう。

生活支援ロボットが身近なものとなってきました。対象者の個別ニーズに合わせてロボットも選択肢の一つとして考えることができる時代が到来しています。作業療法士は「人」に「もの」を有機的に結び付け、対象者の生活を豊かなものへ変えいく支援の達人でもあります。ぜひ多くの作業療法士にロボットを試していただきたいと思います。



みんなに使いやすい文具って？

はじめに

最近地下鉄に乗ると所々でバリアフリー改修工事を目にする今日この頃です。昨年の特大号で東京地下鉄株式会社（東京メトロ）の記事を掲載しましたが、皆さまも変化を感じて頂いていますでしょうか？！

今回は知っているようでよく知らないユニバーサルデザイン（Universal Design以下UD）をご紹介します。

臨床現場で既製品をもとに自助具を作る機会があると思いますが、以前と比べると一つの道具に対して多種多様な商品が増えた為か、改修作業が少なくなったと感じる方も多いのではないのでしょうか？！そこで今回は身近で特にそれが著明な文房具に焦点をあててみたいと考え、UDを導入し数々の商品を一般社会に浸透させているコクヨS&T株式会社に伺い取材してきました。



コクヨ S&T 株式会社品川オフィス外観

UDとは？

1980年代にロナルド・メイス博士（米）が“できるだけ多くの人が利用可能であるように製品、建物、空間をデザインすること”と提唱し、分かりやすいように7つポイントを挙げています。

公平性：誰にでも公平に操作できること

自由度：使ううえで自由度が高いこと

簡単：使い方が簡単ですぐ分かること

明確さ：必要な情報がすぐに理解できる事

安全性：使う時に安全・安心であること

持続性：使用中体への負担が少なく、少ない力でも楽に使用できること

空間性：誰にでも使える大きさ・広さがあること

この7つの原則をすべて満たすのがUDと言われるものです。

皆さまの周りにこの7原則があてはまるものはありますか？！

例えば・・・



商品名：ハリナックス

紙10枚まで綴じれる針なしステープラー。従来のホチキスと違い、手全体でとじることができ（両手使用可）、針補給というあの細かい動作いらず。年齢や膠原病等さまざまな理由で握力の弱い方はどうするの？と今お考えになった方がいらっしゃると思います。UDでは“できるだけ多くの方に”がポイントとなってきます。このことはのちほどふれさせて頂きます。

ではもう一つ。



商品名：エアロフィットサクサ

刃先部分で軽い力で切れ、切れ味は従来のものの4倍。エアークッションハンドルで指への負担を軽減。ハンドルの形状は2種類のほか左利き用あり。

バリアフリーとUDの違い

もうお気づきかと思いますが、両者の違いは、①対象者と②思想・発想の違いにあります。①前者は高齢者や障害を有する方に対し、後者はなるべく多くの方に。②前者は生活のさまたげとなる物理的な障壁を取り除き使いやすい環境に変化させる事に対し、後者は最初から多くの方に使いやすいものを作るという発想。例えば街中で見かけるスロープ。段差にスロープをつけるのは前者の考え方であり、設計時点でスロープを計画してつくるのが後者の考え方です。完成したスロープは一緒であることが両者を混同してしまう理由なのかもしれません。

もうひとつの大きな違いは③普及方法です。前者

は法律等で普及する行政指導型に対し、後者は良いものを推奨する民間型と言えます。

UDの商品ができるまで

コクヨ（株）のユニバーサルデザイン取り組みについてクリエイティブプロダクツ 事業部メカニカルステーションリーVU 開発第1グループ 課長青井様にインタビューしてきました。



青井宏和氏

UD導入当時の動き

“1995年あたりにUDが日本で盛り上がりを見せ、いたちょうどその頃、軸となる強みのある商品作りが必要だと感じていた時期だったので、スムーズに導入し盛り上がっていたと聞いています。”（当時青井様はファニーチャー担当）

“その頃文房具は成熟してそれ以上進化しないと思われており、低価格化も起こっていた時代だったのでプラスアルファの価値をつけるためにUDを導入しました”と広報担当伊藤様。

“また、物を通して世の中の役に立つという先代の言葉とUDがうまく合致していた”とのこと。

商品ができるまでの過程

1. 仮説設定・検証

ユーザーはどんなことで困っているのか仮説をたてる。

2. ユーザーニーズの具体化

直接インタビューやwebアンケートで不満に耳を傾ける。

3. 設計・試作

膨大な数の試作品をつくる。

4. 内部評価

5. ユーザー評価

6. 細部修正・コストチェック

7. パッケージング決定

説明文字が読みやすいよう、文字の大きさ・背景色とのコントラストを検討

8. 商品化

(HPより抜粋)

この過程の中で特に厳しいところは？

“試作品をつくりユーザー様に意見を聞き修正をしていくことの幾度とない繰り返しが難しい部分であり、我々の成長に繋がっている部分であると思います。”

多種多様な主観的なユーザーからの意見をどのように一つの方向にむかわせるのですか？

“統計学的なもの（これだけの人数に聞けばいいのではないかという量の指標）と個々の意見の中から、この困りごとだったらこういう方々に使ってもらえるのではないかというターゲットがみえてきま

す。”“顧客ではなく個客に聞けという言葉があるのですが、そのターゲットユーザーの意見は背後にある多くの方々の意見の真実をとらえているようなところがありますので、経験則の部分が大きいですがこの部分を中心に作っていきます。”

物づくりのなかで特に大切になさっていることは？

“はたしてユーザー様の願いにかなっているのか・必然性はあるのか？とその都度客観的な視点で振り返る事です。それとどれだけ“際、までやりつくすか”というところなんです。例えば、てこの力学的な部分はもちろんのこと、尖った危険な部分はないか等どれだけやさしさを盛り込んでいけるかです。”

ジレンマ・課題

“健常の方からハンディをお持ちの方に試して頂いて作った“テキタ、”というはさみがありますが、どうしても高額だったり特殊な形になったりします。弊社が出した一つの答えは、使用方法によってわけることです”“例えばたまほっちというホチキスは、握ること以外に特化したものであごや肘で使えるホチキスです。パーフェクトとは思っていませんが、握る以外の使い方に適したホチキスと握る事に特化したホチキスを出すことでユーザー様に選んでもらえるようにしています。”

“幅広いユーザーの方々を想定して商品のバリエーションを増やしているのですが、その商品の存在と価値をしっかりと伝えきれていないところが現在の課題です。”

今後の展望

“UDは生き物だと思っています。2000年以前に作られたものは商品だけがユニバーサルデザインでし

たが、5年ほど前からパッケージの色・デザイン・いかに開封しやすいか・選びやすいか・価値が伝わりやすいかというところまで範囲を広げています。10年前の思いやり・やさしさは今では当たり前。その時代時代に合わせたUDを作らなければならないと思っています。個人的には、次のUDはどのようなものかを見据え、成熟した社会の中で新たなコンセプトのUDを提案しなければならないと感じています。”また“今後UDという概念が良い意味でなくなっていくと思います。世の中で当たり前・スタンダードとなってわざわざ言わなくとも配慮されている、そういうものが日本の商品のクオリティーなんだろうと思います”

UDが日本のスタンダードとなるべく、御社では次世代を担う小学5年生から高校3年生までを対象に出張授業を無料で行っていらっしゃいます。UDを学びながら相手の立場に立って物事を考えることができる思いやりのあるやさしい心を育てていきたいという想いから取り組まれています。

取材を終えて

日常生活を送る上で必要な機能回復をサポートする作業療法士（Occupational Therapist以下OT）の役割の一つに自助具（福祉用具）の選択・提供があります。市販のもののほとんどが、利用者個人にとってそのままでは使いにくい部分がある為手直しが必要になってきます。その手直しもOTの役割で、個人の思いに寄り添い、創意工夫で使いやすさを追求しなくてはなりません。そこでOTとは方向性は違いますが、物づくりのプロであり、UDという人にやさしいコンセプトを採用し成功されているコクヨS&T株式会社様に取材する運びとなりました。これ程まで御社のUD文房具が一般社会に浸透した

理由を尋ねたところ、時代背景や社会の成熟感から一般的に受け入れられたと謙虚なお答えを頂きました。しかし作り手側が現状に満足せず常にユーザー目線でより使いやすいものを追求されているからこそだと思いました。その謙虚な心の持ち方とたゆまぬ努力・常に先を見据える姿勢のおかげで私たちの生活が変わり、視点が変わり、考え方が変わってきているのではないかと取材を通して思いました。私たちOTも全くフィールドは違いますが、共通する部分・共感する部分・見つめなおす部分・改めて身を正す部分等あるのではないのでしょうか。

取材最後にコクヨさまはUDですか？という身の程知らずの質問をさせて頂きました。ハード面はどうか分からないとのお答えでしたが、通されるお部屋・移動中に横目でちらちら覗いた空間は、都会の洗練された雰囲気が漂いながらも広々とし太陽の光・木のぬくもり等どこかほっこりとさせてくれました。ソフト面は、皆が通るであろうライフイベントに対し制度が整っているため子育て世代に限らずあらゆる世代にやさしくしかも社員全員の意識が高く周りの理解があるためストレスなく働ける環境であるとのことでした。

青井様がおっしゃったように、社会全体・個人ともに成熟した豊かな考えを持ちUDという概念が浸透し当たり前となっていくことを願いつつ結びとさせて頂きます。

最後にコクヨ株式会社広報コミュニケーション部 佐藤様、伊藤様、上島様、商品開発部青井様、お忙しい中取材に御協力頂きありがとうございました。そして数々の無礼をどうかどうかお許しください。

アメリカ留学体験記

庄原由美子

私は、この夏にアメリカの大学院OT学科を卒業しました。留学までのプロセスと、1年間で完了するPost Professional Master's Programを通して、学んだことを書かせて頂きます。

留学前、回復期病院で約5年勤務している際、アメリカや他国から教授が来日し、彼らの勧める理論や評価法、テクニックを学ぶ講習会に参加していました。それらを受講するうちに、海外には”日本より発展した何か”があるのではないかと漠然に思うようになりました。また、日本の教科書は海外の情報を翻訳しているため、最新の情報が翻訳されるまでにタイムラグがあり、海外で行われているリハビリより数年もしくは数十年分、古い情報のもとにリハビリを実践しているのではないかと疑問を抱いていました。そのため、本当に根拠のある作業療法（EBOT）を海外OTは実践しているのか自分で確かめ、日本では導入されていない最新のテクニックや理論を直接学ぼうと留学を決意しました。

まずAmerican Occupational Therapy Association（AOTA）のサイトから大学一覧を抜き出し、自分の金銭面や立地等の条件に合う大学を絞り、すべての大学に応募条件の確認のメールしました。同じ名前の学位プログラムを開設していても、選択可能な授業内容が異なったり、受験自体認めてもらえない学校もあり、各大

学で対応は様々でした。それらの中で、対応の確実な学校を選びました。留学決意した時点では日常会話もままならない英語能力で、何から手をつけていいのかわからず、周りに社会人留学の経験のある友人もいなかったため、情報収集からかなりの時間を費やしました。数年かけて、行きたい学校の選択、金銭面、受験のための書類は準備したものの、必須の英語テストのスコアアップは、応募直前までかかりました。

私の受講していた、NY大学のPost-Professional Master プログラムは、1年間で修士課程（MA）が完了するプログラムです。選択科目15単位、必修科目15単位を秋、春の2学期間と冬休み、夏休みの間に取ります。また、選択科目は、OTだけでなく、美術、音楽等の芸術分野や、ビジネス、金融等の他学科、学部の授業をとることも可能です。プログラムの内容は



1) 週末も通いつめた図書館です。



2) OT 学科のフロア入り口



3) OT 学科のフロア入り口フラッグあり

交渉次第で柔軟に変更可能です。

留学経験を通して、OTの専門的な知識のみでなく、文化・政治的背景の違いの中で、多くのことを学び、経験しました。「自分の意見を言わないことは、失礼にあたる」という文化の中で、なかなか自分から意見を言い出せず、ディスカッションが中心の授業で、全く発言できずに終わってしまったこともあります。日常会話を含め、発言には、いつも“なぜ”そう思ったのか、という理由が重要視される環境の中で、いかに今まで自分の意見をまとめる作業をしてこなかったのか気づきました。これらは、私にとっては海外での経験がなければ得られなかった特別なものだと思います。また、私のプログラムの友人は、シンガポール、インド、台湾からの作業療法士たちでした。他にも中国、イスラエル等からきている人もおり、違う文化背景、医療制度を聞くことで、各国の抱えている問題や、リハビリ事情を知ることができました。同時に、自分の国、日本を振り返る良いきっかけともなりました。

アメリカでは、オバマ大統領の推進するAffordable careにより、一部の州を除き、移民の人、低所得の人にも保険に入れる国民皆保険が2014年1月より段階的に開始されました。現在は、まだこの新しく導入された医療保険システムの動向をうかがっている状況です。保険は個人の収入によって大きく左右されているアメリカでは、平均入院期間も日本より短く、作業療法の処方もクライアントの保険状況次第であり、限定的な期間の中での効果を期待されます。それに比べ、日本ではすべての国民に比較的、同じ質の医療サービスが提供されています。アメリカでは、小児分野へのOT介入は早期から発展していましたが、老年期への介入は、ベビーブームの年代が高齢期に突入している現在、ようやく進行している状態です。さらに、アメリカの大学のプログラムを通じて確信したのは、日本の作業療法の現場も教育もアメリカとレベルの差がないということです。私が日本にいたときに、根拠もなく欧米のリハビリテーション、教育は日本よりも先進的でより高度なものだ、と考えていました。それも、言語の壁による情報量の少なさからくる勝手な想像だったと気づきました。世界中で生み出され、変化している作業療法理論は、先生方のおかげで、ほぼリアルタイムで日本に入ってきています。

臨床に関して、私が以前、勤務していた環境を振り返ってみると、リハビリスタッフがとても多く働いていたので、いろんな得意分野を持ったセラピストにもまれて、徒手療法から作業科学まで、幅広く理論に基づい



4) NYU のキャンパスエリアに、NYU を象徴すると言ってもいい公園があります。この公園を中心に、キャンパスビルディングが展開されています。毎日、観光客や、路上パフォーマー、NYU の生徒で大賑わいの公園です。ここでランチを食べたりしていました。

うか。また、英語での研究発表の数が少ないために、海外では、日本がどんな作業療法を行っているのか知られていない状況です。より多くの情報交換を行うためにも、是非、養成校講師の先生方だけでなく、臨床家の先生方、学生の皆さんにも英語での情報収集や研究発表を進めて頂けると、海外からのアプローチも増えるのではないかと思います。海外留学に興味のある方は、限りある時間とお金を無駄にしないためにも、まず何のために留学するのか、目的を明確にすることをお勧めします。各国、各大学によって、強みが異なるので、なぜその大学なのか、その国が良いのかを整理し、さらに、卒業後のキャリアプランも明確であれば、より実りある留学となると思います。また、留学経験者に話を聞くことが自分のイメージとのギャップを埋めるためにも、とても有効です。今後は、日本の皆様に海外でのリハビリに関する情報提供と、臨床の現場で自分がこの留学を通じて得たものを還元していきたいです。

た臨床実践を間近で見て学べたことは、留学するにあたって、私の基盤を作ってくれました。恵まれた人材のなかで、一人で外部の勉強会に行くだけでなく、困ったり悩んだ時にすぐに相談できる同僚、先輩が多かったです。自分の求知の欲求を育ててくれたとも言えます。また、チーム医療が徹底された環境であり、作業療法士、理学療法士、ソーシャルワーカー等、職種垣根を越えて知識、スキルの交換ができ、クライアント中心のアプローチの実践を学ぶことができました。当院のみでなく、療法士の自主的な勉強会、研修会への参加、向学心の高さは、海外に引けを取らないと感じています。

しかし、よりたくさんの最新情報は、英語での文献に多いことは確かです。ネット上にたくさんの無料で読める英語研究論文はあります。今や、海外に行かなくとも情報は手に入る環境なので、是非、身近な同僚や職場で英語文献の抄録会等行ってみてはどうでしょう。



5) NYU クラスメイトと WFOT 横浜での NYU ブース内の写真です。(本人に確認とっております)



東京都作業療法士会の活動

都民の医療・保健・福祉に貢献することを目的に、会員（都内在勤あるいは在住する作業療法士）の技能と資質の向上に務めるとともに、作業療法の普及発展を図り、以下のような事業を実施しています。

学会・研修会の開催

- ・ 東京都作業療法学会
- ・ 現職者共通研修
- ・ 現職者選択研修
- ・ 基礎ポイント研修
- ・ 現職者研修会
- ・ 他職種合同研修会
- ・ 福祉用具関連の研修会

都・区市町村事業への協力

- ・ 各種委員の推薦、派遣
 - * 介護認定審査会委員
 - * 障害程度区分認定審査会委員
 - * 訪問リハビリテーション専門人材育成研修会カリキュラム検討委員
 - * 東京都リハビリテーション協議会委員、研修テキスト検討部会委員
- ・ 研修会、講習会への講師派遣

会員、一般の方への広報

- ・ 東京都作業療法士会ニュースの発行
- ・ パンフレットの作製
- ・ ホームページの管理運営

啓発・普及活動

- ・ 保健福祉関係イベントへの出展
 - * 国際福祉機器展
 - * 看護フェスタ
 - * 子どもの福祉機器展 等
- ・ 東京作業療法フォーラムの開催

調査・研究の実施、促進

- ・ (一社) 日本作業療法士会パイロット事業の実施
- ・ 学術雑誌「東京作業療法」の発行
- ・ 受託研究、共同研究、委託調査の受け入れ

会員、一般の方への情報提供、その他

- ・ 会員情報の管理
- ・ 福祉用具に関する相談
- ・ 会員への福利厚生活動の実施
- ・ 災害時のリハビリテーション支援

編集後記

今年も都士会ニュースをよろしく願いいたします。昨年に続き2回目の特大号を発行させていただきました。この新年特大号は会員への情報提供のみならず、多くの方々に作業療法(士)を知っていただくという目的もあります。東京都作業療法士会では事業部や広報部をはじめ、今回ご紹介した福祉用具部などが会員外への広報や作業療法の啓蒙活動を行っております。この紙面を通して一人でも多くの方に作業療法を知っていただきたいと思います。また会員の方一人一人が作業療法の広報を担っていると言うことを忘れずに、皆さまのご活躍をお祈りいたしております。

広報部部長 田邊由紀江

※ニュースに掲載されている写真は、ご本人の同意を得たうえで掲載しています。

◆東京都作業療法士会 事務局

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-4-1 新宿Qフラットビル501

TEL: 03-6380-4681 FAX: 03-6380-4684

◆東京都作業療法士会ホームページ <http://tokyo-ot.com/>

◆東京都作業療法士会ホームページ窓口 postmaster@tokyo-ot.com

※お詫びとお願い: 現在事務局での電話対応が困難な状況にあります。

ご質問・ご連絡は、FAX・メールにてお願いいたします。